

# 広郷土史研究会

## 会報

第84号

事務局 呉市広公民館内

〒737-0706 広古新開 2丁目 1-4

電話 71-0706 FAX 73-5304

発行 平成20年3月15日

広郷土史研究会編集委員会

### 大正時代 広村大新開での甘藍栽培風景



大正時代後期の広村甘藍（キャベツ）栽培風景、大新開中央部より中新開方面を臨む。

広村の新開は民家もなく大甘藍畠であったことが知れる貴重な写真である。

明治17年の台風被害以降、新開は海水に浸かったため潮抜きが思うように出来ず、米作が出来なかった。塩に強い甘藍は新開でも良く育ち広村農家の救世主となった。

(写真提供 広杭本 玉木 ヒサコ 氏)

#### 目次

広甘藍栽培のルーツと矢口家系譜の関係 「藤田家文書」D-3 明治34年7月20日	矢口 一美・・・2頁
広に測候所を設置するための広島測候所長の説明 同文書等の解説	小栗 康治・・・7頁 上河内良平・・・12頁
例会報告	吉田 顕治・・・13頁

# かんらん 広甘藍栽培のルーツと矢口家系譜の関係

矢口 一美

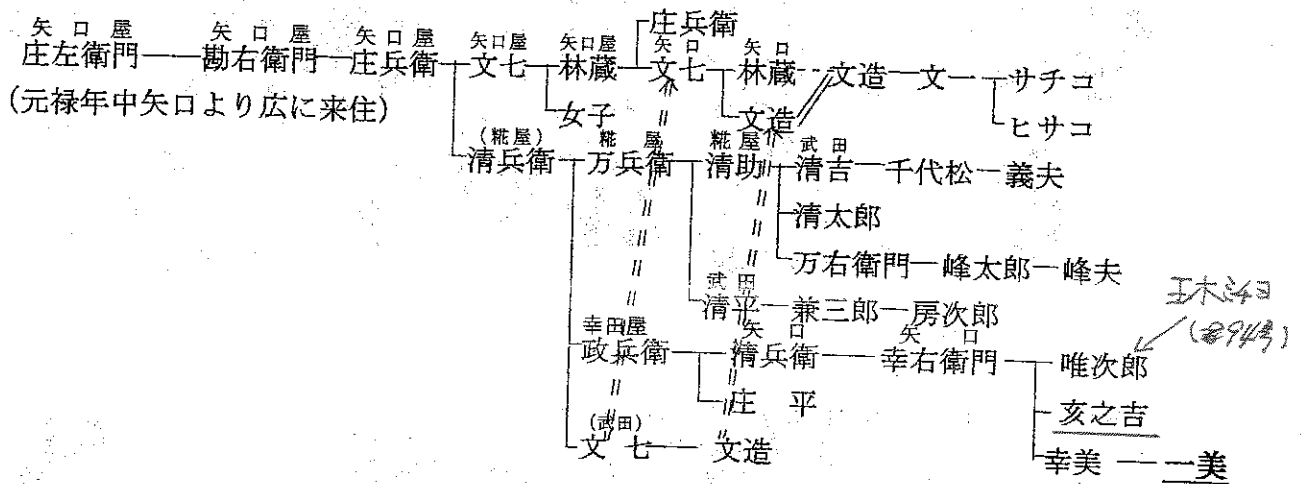
## はじめに

戦中戦後の広大新開一帯はキャベツ畑が広がり、そのキャベツは「広甘藍」と称され近郊では有名であった。この「広甘藍」の栽培のはじまりについては諸説あるが、私が知る限りでは、私の叔父にあたる亥之吉が私のおじいさんの幸右衛門の所へ移住先の北米から種を送ったのを大新開の自宅近くの「さくな

いだ」(柵内田)で栽培したのがはじまりで、このことを矢口の系譜と年代を照らし合わせながら報告したい。

矢口の系譜は以下のようにになっているが、本資料は戸籍謄本・墓石・棟札・各種石碑・『広系図集』を参考にして作成したもので、このうち亥之吉が前記のように広甘藍栽培にかかわっている。それは追々説明することにする。(西暦は筆者記)。

## 矢口の系譜



没年月日	在所屋号	代名	前(没年歳)
寛保2 (1742) 年9月6日	大新開 矢口屋	①	庄左衛門
延享4 (1747) 年3月8日	矢口屋	②	勘右衛門
天明9 (1789) 年4月5日	矢口屋	③	庄兵衛
文化9 (1812) 年5月13日	矢口屋	④	文七
文政元 (1818) 年8月10日	矢口屋	⑤	林蔵
		⑥	庄兵衛
明治5 (1872) 年7月8日	矢口	⑦	文七 (76才)
明治24 (1891) 年10月21日	矢口	⑧	林蔵 (68才)
明治44 (1911) 年1月1日	全	⑨	文造 (75才)
文政8 (1825) 年1月39日	大新開 (糶屋)		清兵衛
文久2 (1862) 年3月16日	糶屋		万兵衛

明治3 (1870) 年12月4日

糶屋 清助 (68才)

明治44 (1911) 年8月7日

武田 清吉 (82才)

明治6 (1873) 年8月20日

大新開 <sup>幸田屋</sup> 矢口 政兵衛 (91才)

文久3 (1863) 年9月27日

全 庄平 (44才)

明治18 (1885) 年1月5日

全 清兵衛 (63才)

大正10 (1921) 年6月12日

全 幸右衛門 (77才)

誕生年月

没年月

苗字 名前

明治4 (1871) 年10月生 昭和18 (1885) 年8月没 矢口 唯次郎 (72才)

明治8 (1875) 年2月生 昭和30 (1955) 年1月没 全 亥之吉 (81才)

明治25 (1892) 年4月生 昭和44 (1969) 年9月没 全 幸美 (77才)

このほかに田村信三の私家本『矢口の記』がある。なお、ここでは妻女等は便宜上省略させていただいた。

### 系図の解説

『矢口の記』によると、矢口屋は本藩高宮郡矢口村(芸藩通志によると戸数257、人口1143人とある)より移住した文四郎が広に移住したのを期に庄左衛門と改名し、これが広村矢口の初代で、出身村名をそのまま屋号とし、親は勘右衛門、2代は庄兵衛としている。

しかし広村の過去帳には文四郎の先代であるはずの勘右衛門が記されているので勘右衛門も広村に来ていたことになり、過去帳記載からすれば本作図の系譜が正しいことになり『矢口の記』記載は不正確ということになる。

それはさておき、初代は元禄年中に広村に移住したとされているが、元禄年中といえは大新開の名請人を募集していた時期になり可能性はないことはないのだが『大新開名請帳』には初代、二代の名前は見えず確認することはできない。

矢口屋は代々つづいていたが7代目文七(明治5年7月没)の代に苗字矢口となっている。この文七は本家の棟札に武田と記されており、矢口に改めて7代目本宗家を継いでいる。文造は文七の子どもだが8代目を継いで9代目になっている。

私の家は代々幸田屋の矢口と称していた。

苗字を考える場合、明治3年9月に政府が平民に苗字使用を許可したのをうけて広島県も翌明治4年10月に平民以下に苗字を許可し、宗門人別帳も廃止され行政が直接戸籍を扱うことになったが、これを明治5年の干支にちなんで「壬申戸籍」と称した。これにより臣民一般(華族・士族・卒・祠官・僧侶・平民)身分にかかわらず屋敷、家屋単位に戸主を定め、その戸主が家を代表し、家族構成員のいかなる変動も届け出なければならないようになった。全体として完了したのは明治6年3月であったが、明治以前にあって苗字を名乗る意味の重さを知っていた6代目文七がすぐさま屋号の矢口を苗字としたので過去帳に俗称矢口文七と記されたのであろう。

三代目庄兵衛の次男清兵衛は矢口屋の出で糶屋の祖ということになっている。その子万兵衛も屋号を糶屋と称し、その子清助も屋号を継いだがその子清吉は苗字を武田にしている。

清兵衛の次男政兵衛は屋号を幸田屋として、清兵衛、庄平、幸右衛門と家系はつづいた。

政兵衛の弟として文七がいるが屋号を武田と称していた。

清兵衛の子幸右衛門の三男が私の父で、次男の亥之吉が、話しが長くなったが広甘藍(かんらん・キャベツ)栽培のはじまりにかかわっている。

## 苗字のはじまり

苗字を考える場合、現在の苗字から先祖を尋ねて江戸時代やそれ以前の似通った有名な出自をもつ系図につなげたりすることは十分注意する必要がある。先祖を捜すにはまず第一に明治5年前後の苗字創生期にどうなったかを明らかにしなければならない。よしんば家に系図のたぐいが残っている場合でもそれを鵜呑みにするのではなくさまざまな検討を加えなければその系図が正確なものかどうかはわからない。江戸時代には系図作成を職業のようにしていた者もいたので、金を積めばもっともらしい系図をつくったものである。

苗字創生期にはいくつかの波がある。最初はもちろん『壬申戸籍』作成時期である。つぎに徴兵忌避の時期で、明治6年1月10日施行の常備兵役概則には、【五・一家の主人たる者、六・嗣子並びに承祖の孫、七・独子、独孫、九・父兄存在すれ共病氣若しくは事故ありて父兄に代わり家を治める者、十・養子】などの規則により、特に「一家の主人たる者」は徴兵免除となるので続々と独立がはじまり苗字が増えていった。明治8年7月の小田県（旧福山藩）の「徴兵の義に付布達」によれば「年齢相当募集の際に臨み養子或いは分家等続々願出」がなされた。広島県でも徴兵反対一揆が頻発していたので徴兵逃れのためにいろいろ工夫したにちがいない。このため明治9年度の第五管区における壮丁総数52,577人のうち免役該当者は42,219人という状態であった。この時期に新しい苗字がおびただしく創出されたので、この時期をいかに解明していくかがそれ以前のご先祖を尋ねるためのかぎになる。現在の苗字でもって先祖の系譜をさかのぼらせるのは危険きわまりないといえる。

## 広甘藍栽培のルーツ



写真上、大新開矢口家の前。牛を使っているのが私  
私はかつて「広大新開昨今よもやま話し」  
(平成11年1月)に広甘藍栽培経緯について  
報告したことがある。それ以後断続的に広甘  
藍の由来について諸所から問い合わせがあり、  
それは今もつづいている。

ふり返ってみると、本会機関誌第9号で  
「広のキャベツ（広甘藍）の原産は北米産の  
ものです。明治10年頃第一回の移民船で阿賀  
の三好さんが北米に移民として移住する時、  
広近郊の人5～6人一緒に行ったそうです。  
この時に渡米した人が1年くらい後に、広の  
土によく合うかもしれないと思ったのか、キ  
ャベツの種を広の知人に送ってきたそうです。  
これを受けとった人が中心となってキャベツ  
を栽培したのが広キャベツの始まりといいま  
す」といった。

その後取材をうけるたびに少しずつ思い出  
したこともあって「広甘藍は私のおやじが栽  
培を始めたのが最初」などとも話した。

今になって考えるといろいろ記憶違いがあ  
って、今回の報告を期にもう一度記憶を整理  
したり調査したのが以下ある。

第一に、広甘藍の原産地は北米で、北米移  
住者が広に種を送って栽培を始めたことは間  
違いないのだが、それがいつ頃かが問題とな  
る。私はこれまで明治8年～10年頃と発言し  
てきたがその根拠は、私の父の兄「亥之吉」  
が北米に移民として渡米しているからだ。し  
かし系図にみられるように亥之吉は明治8年2  
月生まれで、8才で小学校に入学して4年後

には学校をやめて屋根屋の手伝いをしていた。12才の頃のことになるが年少で危ないし次男なので家を継ぐこともできないしで、おじいさんや親が相談して、阿賀の三好さんという人がサンフランシスコに移民として行くことにしているのだが一緒に行く人を探している。この際だから行ったらどうか」とさそったらしく、一緒にサンフランシスコに旅立ったという。時期は明治20年頃のことというのが正解となる。

その後何年かして亥之吉が広の幸右衛門の元へキャベツの種を送ってきたという。幸右衛門はそれを「柵内田(さくないだ)」へ植えて栽培をはじめたという。これまで私は「私の親、幸美のところへ送ってきた」と言ったこともあったが年代が合わないので間違いだと気が付いたのでここで訂正させていただく。

なお、三好さんが同郷の仲間数人と行ったのでそれらの家族の元へもキャベツの種が送られた可能性もあるのだが「広甘藍」と称されるようになったことから、サンフランシスコ

と同じように若干潮気のある地質だった大新開が一番栽培に適していたために急速に広まったと考えられる。このため日清戦争(明治27~28年)、日露戦争(明治37~38年)時には軍部に納入していたと聞いている。

ただしサンフランシスコに移住した時期について「第一回移民船」「第二回移民船」で、と表現しているのだが、これについては広島県が発行している『広島県移住史』を調べてもよくわからない。しかし『広島県史近代I』「広島県の都市別、年度別、官約移民数」表、賀茂郡の項に「明治20年5人、同21年31、同22年84、24年58、同25年48、同26年93人」など記されている。もし明治20年に賀茂郡の5人が出稼ぎ移民として渡米したのが三好さん一行であれば符合するのだが確かなことはわからない。『広島県移住史』年表では当初の移住はハワイということになっているからだ。

しかし亥之吉一家は現実には現在もサンフランシスコに在住しており、行っていることは間違いない。



写真上 中央が矢口亥之吉 大正期米国から一時帰国した時に撮影した。

尚このほかに広甘藍栽培の担い手であった人に大新開の中村文太郎がいる。

どちらにしても広でキャベツが栽培されるようになったのは明治20年に亥之吉がサンフランシスコに移住してから後であることは確かだと私は思っている。そうすれば私が親や親戚の年寄りから聞いていたことと合致する。

サンフランシスコに移住したのが5~6人であったとすれば、それぞれがキャベツの種を故郷に送ったことも考えられるのだが、それらが故郷で栽培されつづけていたとしても結局「広甘藍」だけが実を結んだということになる。

## まとめ

私は我が家の先祖について昔からいろいろ調べてきましたが、このたび報告するについて、根も葉もないことを言っはいけないので市役所について戸籍謄本をずいぶんと調べてみました。あたりまえのことですが、これが勉強になりました。

これまで矢口家について記した本が何冊かありますが、それらの系図の項と戸籍謄本を照合すると、謄本にないものが系図に挿入されていたりしてその本の記載の間違いに気がついたりしました。

また、天保年間の矢口家棟札の記載から新たな事実を確認することもできました。さらには墓石に刻まれているのに系図に記載のない者もみつけるなどいくつかの成果がありました。これらは確かな証拠となるようなものを探し求めてきた結果といえます。

「広甘藍」については、広の平坦部の新開は入り海であったものを江戸時代中期以後つぎつぎと堤防を築いて干拓したので、それらの堤防は築造いらい幾度となく自然災害により決壊し、そのたびに新開=村は大きな被害をうけてきたこと。

幕末から明治にかけて村が困窮したのも堤

防決壊による農作物の不熟が要因のひとつであったといわれていること。

現在古文書部会で解読中の藤田家文書にも明治初期の被害の経緯が詳細に述べられ、名田の『膺懲碑』もそのうちのひとつです。

広甘藍は明治20年以後栽培されはじめたが、すでに明治19年に呉鎮守府開庁のための工事がはじまって呉に人口が急増しはじめていたので野菜の需要も高まりつつあった。このため急速に栽培がひろまり増産されるようになったのだ。

明治27~38年 明治37~38年

日清、日露戦争で海軍の要請に応え広甘藍を大量に納入し、農家もこのため収入が増えて軍に対して他村に比べ多額の寄附をしたことが明治43年「模範村広村」誕生に寄与した一因であることは疑いない。

その後大正9年に呉海軍工廠広支廠が開廠されるようになって地元でも消費されるようになりさらに発展した。

しかしその後は品質改良によって新しい品種が栽培されるようになり、昭和35年以降広甘藍は隅に追いやられて栽培されなくなった。

現在ではその広甘藍はいわば「まぼろしの広キャベツ」あつかいされるようになっているが、栽培がはじまった明治20年以後に果たした歴史上の役割は大きいものがある。

いまここでもう一度その歴史をふり返ってみるのも郷土の歴史を知るうえで意義があるのではなかろうか。

これまで私は幾度となく「広甘藍」について調べたことや思い出したことをのべてきたが、ここで記し忘れたことや「広甘藍」にまつわるわたしごとは例会当日みなさまに詳細に報告したいとおもっています。

以上

賛助金志納者ご芳名 (敬称略)

ありがとうございました。

金 17,000円

賀谷 倭登